The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	追悼 内藤高先生
Author(s)	
Citation	Gallia. 2009, 48, p. 75-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

追悼　内藤高先生

内藤高先生は1996年10月に大阪大学文学部比較文学専攻教授に赴任されました。先生はポール・クローデルの研究者として活躍されている第一線の仏文学者でもあり、ご赴任の年から大阪大学フランス語フランス文学会にご入会いただいております。1998年3月7日に開催されたガリア研究会では、シンポジウム「批評と創造のはざまで」にパネラーとして参加、2000年度『ガリア』第40号（仏文学研究室創立50周年記念号）にはご高論「クローデルにおける批評と創造の接点―会話体のエッセーを手掛かりに―」をご寄稿、また2001年度『ガリア』41号には、クローデルが外交官引退後に過ごしたドーフィネ地方の城館で開催された研究集会「クローデル、日本を聴く」に関する貴重なご報告をいただきました。このテーマがご著書『明治の音』につながってゆくことになります。

教育と研究を生きがいとされていた内藤先生は、昨年2008年4月より入院されながらも、学生の指導を病床においても続けられていました。2学期からは復帰されるだろうとの私たちの期待も空しく、8月14日ご逝去されました。

内藤先生とご親交の深かった柏木隆雄先生、比較文学の学会でもご一緒されることの多かった北村卓先生のお二人に先生についてご寄稿いただきました。　（和田章男）

内藤高教授の思い出

柏木　隆雄

2008年10月25日（土）午後3時から文41の大教室で行われた故内藤高教授の追悼の会は、予想を超える多くの方々の参加を得て、江川溫研究科長の簡にして要を得、情理兼ね備わった開会の挨拶から、中直一、佐伯順子両氏による東大比較文学後輩としての内藤氏の思い出と、内藤教授のご令姉内藤美子さんのご挨拶、出原隆俊教授の閉会の辞まで、実に濃密な別れの時間となって、感慨ひとしおとなった。私自身も「内藤教授の人と学問」という題で1時間ほど話をせよ、との仰せで、とにかく時間どおりに収めはしたが、もとよりそれに尽きるものではない。幸い『ガリア』誌上で内藤教授を追悼する頁を組むから、文あらば寄せよとお達しあり、さらに蕪辞を綴ることになった。あるいは追悼会での内容と重なる点もあろうが、お許し願いたい。

内藤さんと初めて出会ったのは1987年4月に遡る。京都大学人文科学研究所の宇佐美斉氏が、「ロマン主義」をテーマに共同研究するということで、私にもお声がかかった。この時、内藤氏は同志社大学商学部の助教授だったが、パリ留学時代の友人である南山大学の丸岡高弘氏も誘って、それぞれクローデル、ユゴーの専門家として参加されたのである。その頃の内藤氏は、ここ十年ばかりの痩せ細

った彼しか知らない人にはとても想像つかないだろうが、ぽちゃぽちゃと太っていて、少しはにかみやの好青年で、バルザックの青年の頃の肖像画にちょっと似ていた。(確かめたい人はロジェ・ピエロ編ガルニエ版『バルザック書簡集』第一巻の表紙の挿絵をご覧いただきたい)。追悼会の時にもこのことを話して、阪大時代しか内藤先生を知らない人から驚かれたが、彼はピンク色のジャケットを着ていて、いかにも若い感じだった。

彼は無口、というより、はにかみが先に立って、私が冗談をいったりすると、困ったような顔をして、唇のあたりを微かに緩めはするものの、笑っていいのやら、別の返答をしていいのやら、ちょっと戸惑っているような様子をするのが常だった。この彼の様子は、以後彼の晩年にいたるまで、ほとんど変わることがない。時には困ったように笑いながら、「そんなことを言うのは柏木さんだけですよ・・・」と、逆襲して見せることもあったけれど、おおむねは、閉口する顔を隠すように、たばこを旨そうに吸ったりするのだった。

人文研の共同研究は、続いての「フランス象徴主義研究」、そして最後の「日仏交感の近代」を入れれば、４年ごと３回で12年間、月一回の研究会を一緒にしたことになる。ただし2002年からの共同研究は、彼の病気もあったり、私自身が忙しかったりして同席する機会はあまりなかった。

内藤さんが同志社大学からフランスに再留学されている時、コロックか何かで、私も１，２週間フランスへ行くことになり、シテのデンマーク館に厄介になったことがあった。同じシテの日本館に住いする彼に手紙してパリ到着を知らせたら、わざわざドゴール空港まで迎えに来てくれ、そのまま親切にもパリ郊外のシテまで、一緒に荷物まで運んでくれた。また彼がパリのシテ島の古いアパートで暮らしていた時、どこかで一緒に食事をしたあと、コーヒーでも飲みに来ませんか、ということで彼の部屋を訪ねたことがある。なんでも大家のおばあさんが日本人びいきで、なんとかという日本の詩人とか、なんとかいう学者先生（とにかく有名な人たちで、その時はふうんと聞いてわかっていたのだが、今その人たちの名前が思い出されない。いい加減に聞いていた証拠だろう）が、代々何人も日本人が住んでいた所ということだったが、BATEAU IVREではないが、何となく螺旋階段で上がっていく感じで、部屋の中が、揺れるような、歪んでいるような、そんなたたずまいの中に、部屋に入っても、中は乱雑の上に、ランプが、―確か裸電球だったように思うが、内藤さんがパチリとスウィッチを捻ると、赤黄色に闇の中に、ボーと光り、それがゆらゆらとした記憶がある。台所も昔風のキチンで、いかにもシテ島の由緒あるアパルトマンという感じだった。そのあとコーヒーを飲んだのか、それともオー・ド・ヴィーを少し喉に垂らしたのか、それはほとんど覚えがないが、とにかく、ゆらゆらと電燈の影が光の中を動いているイメージが、内藤さんを思うと浮かんでくる。あそこは今だに日本人の誰かが住んでいるのだろうか。これを読んで、あぁ、あのアパルトマンか、それはこういうところで、柏木の記憶が間違っている、とご指摘してくださる方があれば、ありがたい。

その内藤さんを阪大比較文学講座の教授としてお迎えできたことは、フランス

文学講座としても実にありがたいことだった。お互いそれぞれの講座を補うようにできるから、と内藤さんに甘言でもって誘ったのだが、私自身が比較の講座にお役に立ったことは少なく、講義やガリアの会などで、ずいぶん助けてもらった。もっとも病気がかなり重くなってからは、彼自身の講座の仕事だけでも大変だったろう。何しろ助教授、助手のいない講座だったから。阪大における比較文学講座の由来については、追悼会の席であらましを述べたとおり。ただ最初比較文学の教授の人事で苦労されていた当時の藤井治彦文学部長から、折しもパリに留学していた私に「お前が比較文学の講座に移らないか？」と打診されたことを打ち明けよう。これは必ずしも私の学問的業績からの話ではなく、一時避難的な教授として私ならあまり波風も立つまい、という先生一流の判断があったのではないかと思われるが、私のようなものが仏文の影をひっぱりながら行くよりも、新しい、若い立派な業績のある先生が来られた方がいいと思い、そのように進言した。帰国すると、選考委員会のメンバーに列なることになり、委員会で内藤さんが適任と決まって、講座を託せる立派な研究者から、不利な条件を承知で来ることについて快諾の返事を得て、ほっとしたことだった。

内藤さんは持ち前の誠実さで、授業もまた学会の事務も熱心にこなされた。共通教育の授業も、病気が進んでからも、大勢の学生相手に手を抜くことなく進めておられた。朝早く出校すると、１時間目の授業に行かれる内藤さんと玄関で出くわす。今から？と聞くと、例の笑い顔を浮かべて、「えぇ」と言葉少なく答えて、ゆっくりと足を運ばれた。そのたびに私は「大丈夫かい？ちゃんと医者のいうとおりやってるか？無理しないで、少し休んで、体力をつけた方がいいよ」と余計なお節介の言葉を投げかけたものだが、それにもまた相変わらずの、昔酒席で僕から冗談を言いかけられて、困ったような、難儀な奴やなぁ、といった目つきをして、それこそ「微苦笑」しながら教室へ向かっていくのが常だった。

こうした誠実さは比較文学の助手（今は助教か）、学生の皆さんがよくご存じだろう。さればこそ彼を慕う人たちが数多く集まるのだ。正直なことを言えば、比較文学は本来、日欧の（それに漢学を加えよう）専門の分野をまず十分習得してから学ぶべきものと私は考えていて、学部の２年、３年から比較文学を専門にする、というのはどうか、と危ぶむ者だが、しかし近頃はそんな二度手間をかける時間も興味もないということか、比較文学へすっと行ってしまって、フランス文学は言葉の難しさを理由になかなか入ってこない。これは困ったことだなぁと、身贔屓の愚痴交りに話したことがある。しかしこと内藤さんの比較文学の場合、まず第一に教授の内藤さん自身に魅力があるからなのだ。これは講座を主宰した私自身が大いに反省しなければならないことだけれど、確かに内藤さんの学問や人柄について、教えを受けた人たちからの話を聞くと、ひとしく尊敬と敬慕の念に満ちている。

そういえば内藤さんが少し具合が悪くなって、代わりに私が比較文学の授業をするよ、と押しつけがましく一時限分を代わって話したことがある。そんな時でも彼は休養すれば良いものを、律儀に授業の前に私の紹介をし、最後まで講義に

つきあって、質問の時間さえ司会してくれたのだ。教室は文41。内藤さんの講義は受講生が多いこともあって、常にその広い教室だった。助教の鈴木暁世さんは、内藤教授がもっとも力を込めて講義をなさった部屋で、奇しくも追悼会が行われたことが、ことさら感慨深かったという。

彼の残した『明治の音』（中公新書）が、ポール・クローデルを中心として、日本に来た外国人たちの五感を追求したものであることからわかるように、彼自身が実に繊細な感覚の持ち主だった（とはいえ、彼が長らく居場所とした研究室に立ちこめる煙草の匂いは、スモーカーでない私には、どうしてこの臭気に耐えられるのか理解を超えたが）。その意味で、仏文学プロパーに徹して、狭く、深く、あなぐり掘る研究よりも、内藤さんは幅広い知見と視野と感覚で、繊細にその読み解くところを論じる比較文学、比較文化が、やはりその性にも合い、また驥足を伸ばす場だったと言える。

病のため大成の途上に止むことになったのは、その意味でまことに惜しんでもあまりある。が、幸い、彼の薫陶を受けた多くの愛弟子たちが、日本の内外で師の播いた大きな、さまざまの種をこれから育て、伸ばして、繁茂させていくだろう。彼の穏やかな、人を魅せてやまない笑顔を想い描きながら、20年におよぶ彼との交遊の思い出の稿を閉じたい。

真の旅人、内藤高先生

北村　卓

内藤高先生に初めてお目にかかったのは、1990年の盛夏、松江で開催された第52回日本比較文学会全国大会の折りである。これはラフカディオ・ハーンの生誕140年を記念する大会でもあったが、そのとき企画されたシンポジウム「西洋ジャーナリストたちの見た近代日本」において、内藤先生は「ロチとクローデルの見た近代日本」というタイトルで話されたのだった。とにかく暑い日だった。会場近くで内藤先生と親しくお話することになったが、先生は白の麻の上下を涼しげに着こなし、穏やかな笑みを浮かべつつカウンターで端然とビールの杯を重ねておられた。その後、幾度となくお会いする機会はあったが、このイメージは今もまったく変わらない。

それからしばらくして阪大に赴任され、熱心に学生の指導に当たっておられたが、あるとき、JRの山陰線だったか福知山線だったか、とにかくローカルな列車の中で偶然内藤先生と出逢ったことがある。先生は手垢のついたプレイヤッド版の書物を手にしておられた。

「お久しぶり。どちらまで？」

「いやあ、まだ決めていません。まあ、このまま乗ってたら、そのうちもとのところに戻ってくるでしょう。ぼくは汽車に揺られて本を読むのが好きなんですよ」

もう日は暮れていた。思うに内藤先生は、車内のざわめきや車窓から洩れ聞こえるさまざまな音に耳を傾けながら、書物という舟で文学の海を自由に旅しながら、自らの独創的な世界を築き上げていかれたのだろう。またそこから私たちに多くの貴重な宝をもたらして下さった。ボードレール『悪の華』第二版の掉尾を飾る長詩「旅」のなかに「旅立つために旅立つ者たちこそが真の旅人である」という一節がある。内藤先生こそ、まさに「真の旅人」であった。そして今度は私たちを置いて、戻ることのないところへと旅立ってしまわれた。寂しい限りだが、心よりご冥福をお祈りしたい。